

寄稿

夜の生活活動を楽しめるまちづくり

宇都宮大学 地域デザイン科学部 教授 大森 宣暁

1 はじめに

「Did you enjoy?」「Very!」ちょうどこの原稿を執筆していた時、エジプト人で弟分のような友人が宇都宮に2週間滞在していた。彼は10年ぶりに来日し、宇都宮に来るのは初めてだったため、最大限のおもてなしをと思い、宇都宮の昼のみならず夜の魅力も紹介すべく、英語が話せる素敵な日本人女性が接客して下さるお店に連れて行ったところ、本当に楽しんでくれたようで嬉しかった。

24時間化した現代の都市においては、人々の生活の質を向上させる視点から、「住む」、「働く」、「憩う」、「往来する」という都市社会の基本的な4要素を、時間軸を考慮してバランスよく配置することが求められるものと考えられる。しかし、従来の都市計画は、昼間の都市活動を主たる計画対象とし、夜間の都市活動が幾分疎かにされてきた感が否めず、人々が、安全・安心・快適に、夜間の活動に参加できる環境が整備されているとは言い難い。

近年、観光振興や地域活性化の観点から、都市の夜の経済活動が「ナイトタイムエコノミー」として注目されている。英国の都市で、グローバル化経済における都市間競争の下、経済活動の機会と中心市街地の活性化の視点で、夜の都市を位置付け直す取組から始まったようだ(van Liempt et al. 2015)。また、「ナイトメイヤー(夜の市長)」と呼ばれる、ナイトタイムエコノミーの振興における広告塔として、産業界、自治体各部局や警察などと連携した調整役を担う職種を置く国も増えている。わが国でも、平成

27年の風営法改正で、0時以降も特定遊興飲食店の営業が可能となったり、平成25～26年の税制改正大綱の中で、企業交際費の損金算入枠の拡大が実現したことによる企業の交際費支出額の増加など、ナイトタイムエコノミー促進のための法制度の改正も進んでいるという(うつのみや市政研究センター 2018)。

筆者は、都市交通計画を専門としているが、平成18年から平成21年まで土木学会の土木計画学研究発表会において、「夜の都市計画」セッションを企画し、夜間の余暇活動や安全・安心など、夜の都市と交通に関して幅広い視点から議論した。しばらく家庭の事情で休止していた本研究テーマだが、めでたく数年前から解禁になり、また、宇都宮の繁華街「泉町活性化プロジェクト」にも参画させて頂いている¹。以上の背景をふまえて、本稿では、筆者の最近の研究成果も紹介しながら、夜も魅力的な宇都宮のまちづくりについて、最近思うところを述べてみたい。

2 夜の生活活動

(1) 夜の生活活動のマクロな傾向

人々の日常生活は、一日24時間、昼と夜の諸活動から成り立っている。広辞苑によると「日没から日の出までの時間」が夜とされており、夜の時間の長さや開始・終了時刻には、季節変動があり、国内の都市においても地域差が存在する。昼と比較した夜の都市空間は、単に太陽が沈み日照がない

¹「泉町活性化プロジェクト」『下野新聞』,2018年11月29日

という違いだけではなく、人々が昼間の喧騒から解放され、安心して友人や恋人と交流できる場である一方、人々を興奮させ暴力や犯罪が多く発生する場でもある (van Liempt et al. 2015)。図1は、NHK放送文化研究所が実施する国民生活時間調査における時刻別在宅率を示したものである (NHK放送文化研究所 2016)。平日 18:00 には、国民全体の 56% が自宅に滞在し、その割合は 21:00 には 82%、24:00 には 94% に達する。土曜、日曜は、さらに在宅率が高く、ここ 20 年でほぼ変化はない。しかし、夜間の在宅率を性年齢別でみると、男性は 20～50 代で在宅率が低く、20:00 までは約 50% 以上が外出しているが (図2)、女性は 20 代を除いて 18:00 には 50% 以上が在宅しており (図3)、男女間で違いがみられる。また、男性は 70 代以上、女性は 60 代と 70 代以上で、18:00 以降は約 80% 以上が在宅している現状である。18:00 以降、行われることが多い活動としては、睡眠以外に、テレビ、食事、仕事関連、家事、身のまわりの用事、レジャー活動があげられる。

以上、夜の時間帯に、国民の多くは自宅で活動を行っているが、自宅外で活動を行う場合には多様な制約を受ける (大森 2008)。夜の (自由) 時間確保の制約をはじめ、夜の活動機会を提供する施設の立地や種類および営業時間、公共交通の運行時間等のサービスレベルの制約のほか、照明が必要になる場合が多いこと、(冬季には) 昼と比較した気温の低下、起床から時間が経過することによる疲労、飲酒後には活動内容や利用可能な交通手段が限定されること、家庭の事情による帰宅時刻制約や経済的制約など、多様な制約条件のもとで、夜の活動に関する意思決定が行われている。

(2) 夜の生活活動に関する研究

人々の日常生活における生活の質や幸福感は、就業、健康、居住、余暇など、多様な生活行動から構成されており、夜の生活活動も重要な要因の1

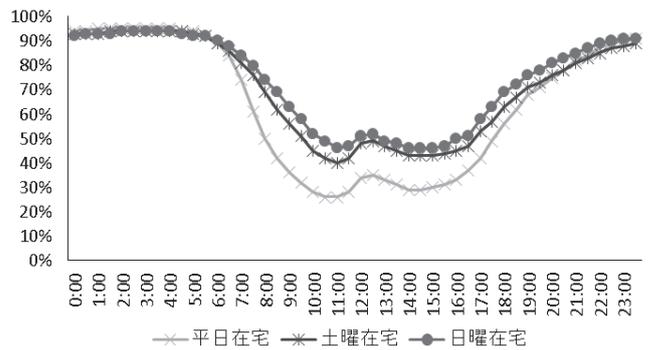


図1 時刻別在宅率

平成27年国民生活時間調査から作成

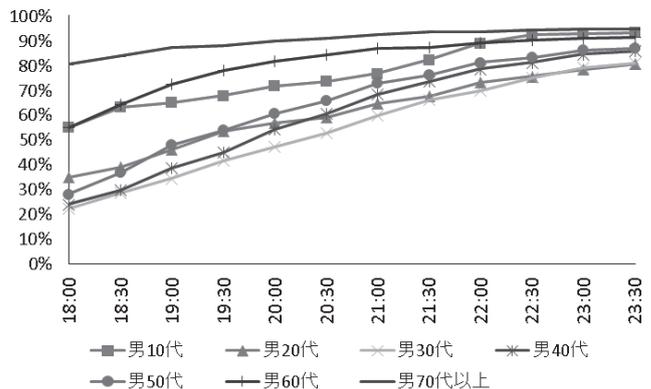


図2 男性年齢別平日時刻別在宅率

平成27年国民生活時間調査から作成

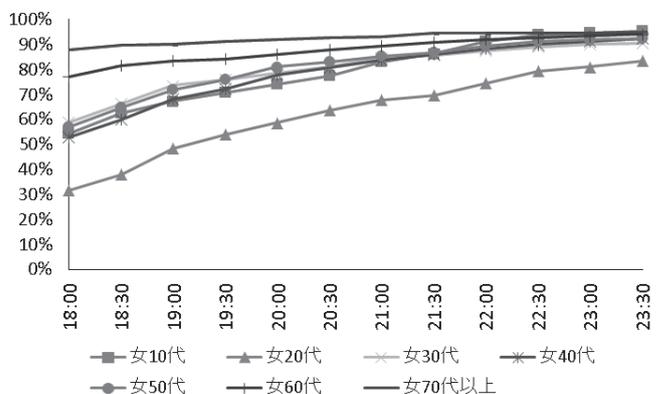


図3 女性年齢別平日時刻別在宅率

平成27年国民生活時間調査から作成

つである (市民生活行動研究小委員会 2015)。近年、都市の魅力进行评估する上で、「官能」という切り口から、夜の街での体験を含めて都市生活者のアクティビティの経験をもとにした、ユニークな評価指標が提案されている (宇都宮市の総合順位は 134 都市中 42 位) (LIFULL HOME'S 総研 2015)。筆者の研究においても、夜の生活活動、特に余暇活動や飲酒活動の量や質が、生活の質や幸福感に影響を与

え、経済の活性化にもつながることが明らかとなっている。以下、いくつかの研究を紹介する。

福岡市都心部の就業者に対して、夜の繁華街での活動内容と意識に関するアンケート調査を行った(安森ほか2009)。その結果、夜の繁華街での活動時間を現状より増やしたい人が約4割存在するが、時間、金銭、体力の制約や、特に家族の制約により、増やせない状況にあることがわかった。また、仮に、①金曜日に公共交通の運行時間と店舗の営業時間を延長した場合、②月曜～木曜の勤務時間を延長し、金曜の勤務終了時刻と店舗開店時刻を早めた場合、いずれのシナリオに対しても、金曜日の繁華街への来街頻度が増加する可能性があることが示された。

関東1都6県居住者で、宇都宮・水戸・前橋への出張者に対して、出張先での自由時間における活動・情報行動に関するアンケート調査を行った(近藤ほか2017)。その結果、日帰り出張者の約2割、宿泊出張者の約6割が、仕事終了後に飲酒を伴う活動を行っていた。また、自営業や公務員、年収が高い出張者、飲酒を伴う活動を行った者、さらに出張先を出発する時刻が遅い者ほど、出張時の自由時間における消費金額が高いことがわかった。さらに、宇都宮市への来訪者を対象とした場合に、出張者全体の総消費金額が観光・私事目的来訪者全体の総消費金額に占める割合は、日帰りで61%、宿泊で50%であり、観光・私事目的のみならず出張者の消費も地域経済に与える影響が大きいことがわかった。

首都圏(茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県)における20～40代の就業者を対象に、余暇活動を、仕事関係の飲酒・私的な飲酒・娯楽活動・文化活動の4種類に分類し、その実態と意識に関するアンケート調査を行った(森本ほか2017)。その結果、若者(25～34歳)は壮年(35～49歳)と比較して、4種類

すべての余暇活動の頻度が高いことや、東京圏(埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県)居住者の方が飲酒の頻度が高いこと、北関東(茨城県・栃木県・群馬県)居住者の方が東京23区居住者よりも余暇活動施設数に対する満足度が低く、私的な飲酒および娯楽・文化活動施設数に対する満足度が、将来の居住意向に影響を与えている傾向が明らかとなった。

東京圏および地方都市の計15大学(17キャンパス)の大学生に対して、余暇活動と主観的幸福感に関するアンケート調査を行った(菅野ほか2018)。回答者は主に工学系の学生が中心であるが、地方都市の学生よりも、東京都心寄りの学生の方が、飲酒活動の頻度は高く、余暇活動を行う施設数に対する満足度、余暇活動への消費金額、余暇活動に対する満足度、主観的幸福感が高いことが明らかとなった。さらに、学部生よりも大学院生、東京23区内の学生、交際相手がいる、自由時間を外で過ごす方が好き、サークルや部活動に所属している、アルバイトを余暇活動費を稼ぐために行っている、飲酒活動および趣味・娯楽活動の頻度および満足度が高い学生が、主観的幸福感が高いことが明らかとなった。

泉町活性化プロジェクトに関連して、宇都宮の繁華街への夜の来街者に対するインタビュー調査を実施した(菅野2019)。その結果、JR宇都宮駅東側や西側と比較して、泉町・本町エリアは40代以上が約8割と、来街者の年齢層が高く、来街の理由として「行きつけの店がある」と回答した人の割合が高かった。また、JR宇都宮駅東側と西側の来街者に泉町・本町に対するイメージを質問したところ、「行きつけの店がない」、「どんな店があるか知らない」という意見が多かった。

3 魅力的な夜のまちづくりのために

服部(2019)は、飲兵衛(お酒を飲み歩くことが

好きな人)に優しい都市の条件として、①千鳥足で帰宅しても自動車等にぶつかられる心配のない歩行環境の確保、②飲んだ後、自動車に乗らずに公共交通もしくは徒歩で帰宅できる、③飲み屋が多く立地して、集積の経済による競合によって質の高い「飲み体験」ができる、④チェーン店ではない個店が多く、それを通じて、その都市・街との接点を有することができる、をあげている。すなわち、宇都宮をはじめ、わが国の多くの地方都市がめざす、コンパクトシティの形成とLRTを含めた公共交通の充実が、夜の飲酒活動の魅力を高めることにも貢献するということである。以下、夜の飲酒活動も含めて、安全・安心・快適な夜間の生活活動に参加できる魅力的な夜のまちづくりのために、考慮すべきことをあげてみたい。

はじめに中心市街地活性化の視点から、魅力的で多様性のある夜の活動機会を充実させることが、観光客や出張者など来街者の増加や、市民の定住促進においても重要である。ここ数年、オリオン通りの通行量は増加しているが、沿道に魅力的な飲食店が増えたことが一因であると想定される。ネットワーク型コンパクトシティをめざす宇都宮において、立地適正化計画も策定されているが、昼から夜、夜から深夜へと時間軸に沿った人々の生活活動の一連のつながりを考慮した施設配置や誘導、交通ネットワークの整備が求められる。大矢(2005)は、盛り場空間は「ハレの空間」、「ケの空間」、「闇の空間」の三層構造から形成されるとし、ハレからケ、そして闇へと人々の活動の推移を考慮することの重要性を説いている。

自動車利用削減や、駐車場空間節約の観点等からも、時間的・空間的に充実した公共交通の整備が有効である(自動運転「レベル3」でも、飲酒運転は禁止される)。宇都宮をはじめ地方都市には、東京などの大都市に数多く存在する立ち飲み屋がないようだ。おそらく大都市と比較して地方都市では、

地価が安いことに加えて、自動車通勤者が多いため、公共交通が発達した大都市のように、仕事帰りにちょっと一杯飲んで電車で帰るといった行動ができず、飲む場合にはじっくりと腰を据えて飲まざるを得ないことが理由の1つではないかと推測する。また、自動車交通と交錯せず、十分な幅員と適度な明るさを有し、景観の良い安全・安心・快適な歩行空間の整備は、複数店舗での飲酒活動のはしごや、帰宅時の鉄道駅やバス停、タクシー乗り場までの安全な歩行を可能とする。近い将来、自動運転技術も有したパーソナルモビリティのシェアリングや、本格的なMaaS(Mobility as a Service)の導入により、飲酒時の繁華街での回遊性や、帰宅時の利便性も向上することが期待される。「歩いて暮らせるまちづくり」、そして夜も「歩いて帰れるまちづくり」という視点が重要であろう。帰宅時に、駅やバス停から自宅まで安全・安心に歩くためには、繁華街のみならず住宅地周辺の歩行空間の整備も求められる。また、夜の騒音や犯罪等を防ぐために、適切な規制と取り締まりが必要となる。

また、高齢社会においては、夜のバリアフリーの視点が、ますます重要となる。たとえば、車いす使用者の利用を前提としていない飲食店も数多い。外国人観光客も急増しており、夜の活動機会提供者側も多言語に対応する必要性が高まっている。会員制や一見さんお断りの店舗を否定するわけではないが、市民と来街者、若者から高齢者、障がい者、子ども連れや外国人など、より多くの人々が夜の活動を体験できるように、飲食店以外の余暇活動を楽しめる施設やイベントも含めて、多様な選択肢が提供されることが望ましい。

夜の活動に関する情報提供も重要である。一昔前と比較して、インターネットやスマートフォンの普及により、夜の活動機会の情報検索は容易となっているが、たとえば、スナックやキャバクラなど、飲食よりも従業員とのコミュニケーション

を主目的とする店舗に関するWeb上の情報提供は少ないようである(菅野 2019)。特に観光客や出張者等に対して、夜の活動機会に関する情報とともに、公共交通の時刻表やバス停、タクシー乗り場など、夜の帰宅交通手段に関する適切な情報提供も必要である。

また、夜の活動を楽しむために必要な時間を確保するためにも、「働き方」を見直す必要もあろう。プレミアムフライデーの制度も、本格的に導入できる職場は少ない。飲み会の途中でも、SNSで仕事の連絡を取ることが可能な時代である。また、子育てで忙しい世代にも、たまには夜の街に出かける時間を確保できるように、子育て支援サービスの更なる充実も必要であらう。

4 おわりに

スナックが、地域コミュニティの場として見直されているらしい²。若者の婚活の場、高齢者には送迎付き、子連れも歓迎、異業種共同オフィスなど、スナックのママの高いコミュニケーション能力が、老若男女、初対面の人どうしの交流を円滑にしている。一方、「オンライン飲み会」といって、スマホやパソコンでオンライン会議ツールを用いて、自宅にしながら飲み会を行うことも可能である。しかし、やはり街に出かけて、非日常の雰囲気の中で、美味しいお料理とお酒を味わい、交流を楽しむという、五感を駆使した体験には敵わないのではないか。夜は、自宅でゆったりと晩酌しながら一家団欒が理想かもしれないが、たまには外出して余暇活動を楽しめるというライフスタイルの選択肢が提供されていることが、生活の質および幸福感の高い魅力的な街だと思われる。そのためには、都市、交通、経済、産業、環境、福祉、教育など、産官学の

²「スナックで会いましょう①～④」『読売新聞』,2018年12月12日～15日

関連主体が適切に連携および役割分担を行うことが必要なことは言うまでもない。

わが国や世界の都市をみると、それぞれ個性があり、独特の色を感じる魅力的な街がたくさんある(写真1～6)。人口減少社会において、都市間競争も激化する中、他都市との差別化や、都市内においても複数の繁華街に個性を持たせることも有効ではないか。引き続き、魅力的な都市の夜を構成する要因と、人々の夜の活動と生活の質との関係を解明するために、研究を進めていきたい。

最後に、夜の街の実践活動に時間を割かれ、締め切り間際の真夜中に研究室で原稿を執筆せざるを得ない状況で、乱文となってしまった点、ご容赦願いたい。

参考文献

- うつのみや市政研究センター, 2018, 「夜のまちづくりによる経済振興」『みや研通信』64 (未公表)
- 大森宣暁, 2008, 「夜のアクティビティ分析に向けて」『土木計画学研究・講演集』37, CD-ROM
- 大矢正樹, 2005, 「盛り場空間の変遷とその要因について」『土木計画学研究・講演集』32, CD-ROM
- 近藤雄太・大森宣暁・長田哲平, 2017, 「出張者の自由時間における活動・消費行動の特性—北関東3都市への出張をケーススタディとして—」『都市計画論文集』52(3), 856-862
- 市民生活行動研究小委員会, 2015, 『市民生活行動学』土木学会
- 菅野健, 2019, 「夜の繁華街の特性と来訪者の活動実態と意識に関する研究」宇都宮大学修士論文
- 菅野健, 大森宣暁・長田哲平, 2018, 「大学生の余暇活動と主観的幸福感」『土木学会論文集D3 (土木計画学)』74(5), I_809-I_816
- 服部圭郎, 2019, 「飲兵衛のための都市づくり」『夜の生活活動を支え生活の質を向上させる都市と交通のあり方に関する研究』日本交通政策研究会
- 安森溪太郎・高見淳史・大森宣暁・原田昇, 2009, 「夜の繁華街における活動実態と時間制約緩和策が与える影響」『土木計画学研究・講演集』39, CD-ROM
- 森本瑛士・大森宣暁・菅野健・長田哲平, 2017, 「若者の余暇活動の実態と意識—地方都市への地域定着を視野に入れて—」『土木学会論文集D3 (土木計画学)』73(5), I_537-I_547
- LIFULL HOME'S総研, 2015, 『Sensuous City [官能都市]』
- NHK放送文化研究所, 2016, 『2015年国民生活時間調査報告書』
- van Liempt, I., van Aalst, I. and Schwanen, T., 2015, "Introduction: Geographies of the urban night", *Urban Studies*, 52(3), 407-421



写真1 ダブリン（アイルランド）の夜：
パブが立ち並ぶ temple・バー地区



写真4 九份（台湾）の夜：
「千と千尋の神隠し」のモデルと言われている



写真2 リスボン（ポルトガル）の夜：
民族音楽ファド酒場があるアルファマ地区

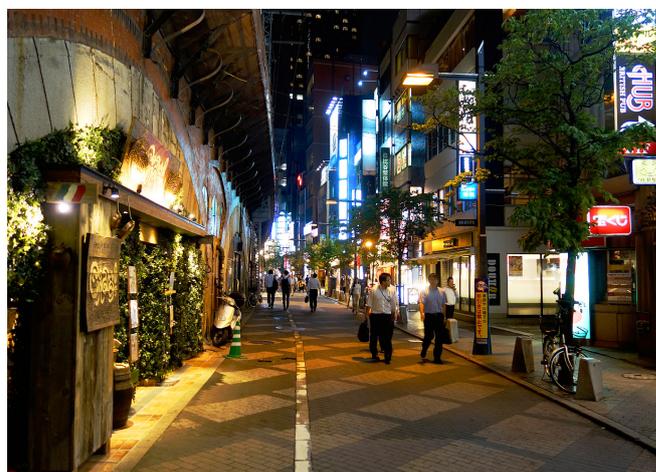


写真5 有楽町の夜：
ガード下の店舗も植栽でお洒落な雰囲気に



写真3 ホイアン（ベトナム）の夜：
川に映る飲食店の灯りが美しい



写真6 上野の夜：
立ち飲み屋も多く昼から飲んでいる人も多い

すべて筆者撮影